

ちかひ、を豊かさにかさ

～多文化共生社会“かながわ”に向けた人づくり・地域づくり～



多文化理解・国際教育の講師を 無料で派遣しました。

講演会やワークショップなど、国際的に活躍する
講師・留学生を講師として派遣した授業の2025年度の実施レポートです。
是非ご活用ください。



もくじ

2025(令和7)年度の実施レポート(概要).....	3
個別報告 15校分(実施順)	4
① 神奈川県立横浜立野高等学校	⑨ 横浜創英高等学校
② 神奈川県立新栄高等学校	⑩ 神奈川県立伊志田高等学校
③ 神奈川県立神奈川総合高等学校	⑪ 横浜清風高等学校
④ 神奈川県立有馬高等学校	⑫ 神奈川県立厚木王子高等学校
⑤ 神奈川県立鶴嶺高等学校	⑬ 横浜創学館高等学校
⑥ 横浜市立横浜商業高等学校	⑭ 神奈川県立川崎北高等学校
⑦ 関東学院六浦中学校・高等学校	⑮ 横浜富士見丘学園高等学校
⑧ 神奈川県立七里ヶ浜高等学校	
先生方のアンケート結果	34
先生方のご感想	35
これまでの実施校一覧	36
これまでのゲストの方々の繋がりのある国・地域一覧	37
講師紹介	38

かながわ国際交流財団(KIF)は、「世界に開かれた神奈川、世界と結ぶ神奈川」を目指し、グローバルな視野を持ち、共生社会をつくる人材の育成や、県内における多文化共生の推進などを目的とした事業を展開する神奈川県所管の公益法人です。

「ちがいを豊かさに～多文化共生社会“かながわ”に向けた人づくり・地域づくり～」を掲げ、さまざまな事業を展開しています。

その中で、青少年世代の人材育成事業では、一人でも多くの青少年が、異なる国の文化や状況について関心を持ち「世界の入口」に立ち、また、多様な文化や言語をもつ人たちと、より密接に関わり共生していけるよう、各種プログラムの企画相談・講師派遣を通じて、高等学校等の国際教育をサポートしています。



2025(令和7)年度の

実施 レポート

実施件数



実施総数…15

派遣授業に出席した高校生の人数…2458人

派遣授業に出席した高校生の学年

(※1つの派遣授業で複数学年や希望者だけが出席する場合があります)



講師・ゲストの方々の繋がりのある国・地域

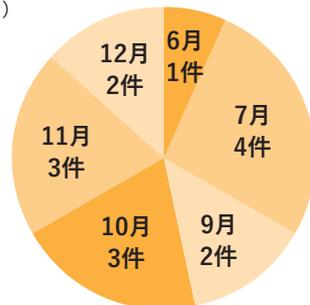


実施方法

対面
15校

実施時期

2025年(令和7)



ねらい

世界の人々とつながる体験を通じて、
私たちが生きている「あたりまえの日常」を見つめ直し、
世界情勢の理解を深める。

実施日 2025(令和7)年6月27日(金)

実施方法 対面

対象 1学年・2学年 合計13クラス 517名

講師 横浜デザイン学院に在学中の留学生 7名

- ① HLAING THANDAR AUNG(ミャンマー)
- ② WIN LIN TUN(ミャンマー)
- ③ THAPA SIDDHARTHA(ネパール)
- ④ NGUYEN THI TIEN(ベトナム)
- ⑤ ZAW LWIN LWIN TUN(ミャンマー)
- ⑥ ELVIRA GAZIZOVA(ロシア)
- ⑦ AKTAMOV UMIDJON NARZULLO UGLI(ウズベキスタン)

実施内容

- 留学生は各教室に1人ずつ入り、1学年・2学年に分けて、それぞれ2回の発表を行った。
- ベトナムのアオザイを着用して発表したり、ミャンマーの言葉で担任の先生の名前を黒板に書いたり、留学生ごとに工夫を凝らした発表で生徒の興味を引きつけていた。
- 生まれた国の食べ物や文化紹介に加え、社会課題、留学生の視点から見た日本など、内容は多岐にわたった。
- とりわけミャンマーでは徴兵制が導入され、日本・シンガポール・タイへ逃れる人が多いこと等、現地の切実な話に、生徒は真剣な表情で耳を傾けていた。
- 質疑応答では、「いただきます/ごちそうさまのような言葉はあるか」「現地で人気のスポーツは何か」「自国のお気に入りの場所はどこか」など、文化・生活に根差した質問が多く出た。

参加した生徒の感想

現地の実際の環境や状況を、リアルに触れられた気がしました。

海外では日本と違うところがたくさんあって、食べ物も考え方も違うんだなと思いました。もっと違う地域のことも知って、その国の問題などにも興味を持ち、その歴史についても知りたいと思いました。

ミャンマーでは日常的に近くで戦争が起きていたり、男の人が戦争に行ったりして、日本では経験することはないから興味がでたし、生活は全然違うけどこういう形で関わって貴重な体験でした。自分が当たり前に行っていることができない人が世界中には沢山いると思うから、感謝して生きたいと思った。

私たちの持つその国の偏見や勝手な思い込みが本当なのかどうかを知れたのが本当に良かったし面白かった。



ねらい

多文化教育の視点も入れたキャリア教育の一環として、
講師の講演を通じ、
どのような進路選択があり得るのかを考える。

実施日 2025(令和7)年7月18日(金)

実施方法 対面

対象 2学年 9クラス 356名

講師 星野 ルネ 氏(漫画家、タレント、放送作家等)

実施内容

- 自己紹介:NHK、国連、JICAとの協働実績等に触れながら導入。
- カメルーン紹介:国旗の説明や、「アフリカの縮図」と呼ばれる背景について説明があった。
- 「同じ場所で同じ時間を共有する経験」を通して、「未知の外国人」が「既知の友人」になり得ることが示された。
- 人は、自分と異なる国・地域、民族、信仰を持つ人々に対して、偏見や思い込みを持ちやすいことが丁寧に言語化された。
- 生まれた時代、国・地域、家庭環境など、本人の努力だけでは覆せない「運」が結果に大きく影響する、という視点が提示された。
- 「同じ国」という共通点で理解し合える一方、考え方や気質の違いで対立することもあり、逆に国が違っても類似性から理解し合えることもある、という多面的な捉え方が語られた。
- 最後に「どの国の人か」ではなく、「その人がどういう人か」で向き合いたい、というメッセージでまとめられた。



参加した生徒の感想

外国人の悩みや喜びを知ることができました。また、日本人は褒めたつもりでも、外国人の国の文化や宗教などによって受け取り方が異なることを知れたので、相手を傷つけないよう、配慮して行動、発言しようと思いました。

外国の方が日本で生活すると色々な問題があったりすることがわかりました。肌の色とかで差別されない世界になるといいと思いました。

海外と日本の常識の違いはあるけど、リスペクトを持って接する大切さや、きっかけの重要性についてわかりました。

自分から見て海外の人はどういう感情なんだろうと思っていた疑問が解決出来て良かった。

国に感謝するのは、そこで育ててもらっているからという考え方が、当たり前ながらも当たり前過ぎて、自分は感謝できていなかったなと感じた。





神奈川県立神奈川総合高等学校

グローバルな視野で活躍する人と出会う・進路を考えきっかけをつくる

ねらい

様々な分野の専門家の講演を通して
多様な価値観を受容し、
多角的に思考し創造する力の育成を図る。

実施日 2025(令和7)年7月22日(火)

実施方法 対面

対象 卒業年次 全クラス(9クラス)250名

講師 矢野 デイビット 氏(一般社団法人Enije代表)

実施内容

- 高校生～大学生の頃は「国際協力」と言うと驚かれる時代だったが、いまは進路や人生の選択肢の一つとして受け止めてもらえたら、という問題提起があった。
- 幼少期にカメルーンで盗賊に殺されかけた経験、日本で児童養護施設で10年ほど過ごした経験が語られ、自身を「不幸」と感じていた時期もあったことが共有された。
- 大人になって出会ったカメルーンの少年に、かつての自分を重ね、彼のために何かをしたいと思ったことが現在の活動につながっている、という流れで説明された。
- 「みんな最初は何者でもないが、少しずつ積み重ねていくことで、いつしか何者かになる」というメッセージが示された。
- 「自分一人の100歩より、100人の一歩」という言葉で、協力の価値が強調された。
- 「一人一人違う、一人一人がマイノリティ」「違うことは悪いことか、同じだと装えないことが悪か」といった問いを通じ、多様性の捉え方が深められた。
- 失敗は人生のどこかで必ずするもの、という前提で、挑戦を促した。
- 支援とは自尊心や信じる力を育てること、国際協力にはエゴも含まれること、大企業は一定期間で撤退する場合もあることなど、現場視点の現実も語られた。
- 東日本大震災の報にカメルーンの子どもたちが涙した話から、「身近さ」の感覚が国や距離で単純には決まらないことが示された。

参加した生徒の感想

今までで1番面白いと思えた講演会でした！みんな最初は何者でもなくて、自分のことから一歩ずつ進めばいいという言葉がすごく心に響きました。将来に向けて頑張ろうと思えました。ありがとうございました！

とても励まされたというか、新たな考え方を学ぶ良い機会になりました。やさしさを講演を通して感じました。何者でもないことに悩む時期だからこそ、何者でもなくてもできることはある、というメッセージが響きました。ありがとうございました。

体験談を交えた話し方のおかげで、「自分だったらどうするだろう」という視点で聞けて興味深かったです。仲間を集めていった過程も聞けて、自分もやってみたくと思いました。

進路の選択に迫られて悩む時期なので、人生の考え方について多くのお話が聞けてよかったです。小さなことを一つ一つ頑張ろうと思います。ありがとうございました！





神奈川県立有馬高等学校

多文化社会を生きる

ねらい

国際交流を通じた多文化理解・他者理解の促進に取り組む中、来年3月に予定している韓国の姉妹校への生徒派遣に向けた事前教育として実施する。

実施日 2025(令和7)年7月24日(木)

実施方法 対面

対象 希望者(高校1~3年) 20名

講師 崔 英善 氏(韓国語講師/日本外国人ネットワーク代表)

実施内容

- 2000年に韓国から来日し、現在は韓国語講師や多文化共生の推進に関わる仕事をしていることが紹介された。
- 地理・宗教・言語・人口など、韓国の基本的な国情について説明があった。
- 高校の種類、制服、芸術高校の様子、給食の例など、韓国の高校生の実態が具体的に紹介された。
- 大学入試の厳しさ、学習塾文化、記念日文化、Study Caféデートなど、若者文化にも触れた。
- ソウルの人気スポット、交通事情、ICカードやアプリ利用など、渡航に役立つ情報も共有された。
- マンションの多さ、床暖房(オンドル)のある暮らし、徴兵制度など、生活文化の特徴が説明された。
- ご飯とおかずの関係、副食の多さ、「ふとっぱら」の文化、日本との味の好みの違いなど、比較を通じて理解が促された。
- 日本は協調性、韓国は個性を重んじる傾向があり、答え方や考え方にも影響するという視点が示された。
- 通訳・翻訳、日本語教育、行政・NGOなど、多文化共生に関する具体的な職業紹介があった。
- 自己開示や異文化理解の大切さ、迷った時は「やる方を選ぶ」など、前向きなメッセージで締めくくられた。

参加した生徒の感想

文化の違いや語学について学びたかった私にとって、すごくいい講演会でした。食文化や感じ方の違いから、新しい視点で韓国を感じられました。共通点や他の違いも見つけて深めたいです。ありがとうございました。

現地の人じゃないと知らない情報や、韓国の人からみた日本など貴重な意見が聞けて良かった。海外に行きたい気持ちが増しました。

同年代の学生文化を、日本と比較しながらわかりやすく紹介してくれて面白かった。よく笑って話しかけてくれて楽しかった。

違いを知るだけでなく、「どうして違うのか」を考えるのが面白かった。予想は外れたけど、正解を聞くと納得できた。国民性の違いは面白い。

韓国と日本の文化は結構違うことがわかった。韓国人から見た日本人の見方も知れた。



ねらい

様々な国の出身者との交流を通して、
多文化理解を深め、生徒の興味・関心を引き出す。

実施日 2025(令和7)年7月29日(火)

実施方法 対面

対象 1~2年 1クラス 35名

講師 柏木実業専門学校に在学中の留学生 6名(全員ネパール)

- ① TAMANG AASHA MAYA
- ② BASNET KUMAR
- ③ ARYAL ANJITA
- ④ SHRESTHA SUJAN KUMAR
- ⑤ KSHETRI SAPANA
- ⑥ RAI ASHISH

実施内容

- 留学生は2人1組となり、ネパールについてテーマ別の紹介スライドを準備して発表した。テーマは「文化と伝統」「自然と観光地域」「学校生活と日常の暮らし」。
- 「文化と伝統」では、食事や祭り、祭りの際に額につける「ティカ」について文化的背景も含め紹介された。
- 「自然と観光地域」では、ネパールには128の文化があること、季節が6つあること、動画を用いた雄大な自然紹介などが行われた。
- 「学校生活と日常の暮らし」では、学校が日曜日から金曜日までであること、夏休み・冬休みに加え祭りの時期にも休みがあることが紹介された。
- 交流時には「夏祭りのように季節ごとの祭りはあるのか」「ティカは食べるのか」など率直な質問が出て、双方向のやり取りが生まれた。
- 発表の最後に簡単なネパール語を教わり、生徒はネパール語でお礼を伝えるなど、学びを行動に移す場面が見られた。

参加した生徒の感想

すごく楽しくて、日本と似てる所も違う所もあって、お互いに尊重できたら良いなと思いました。

日本とネパールはそんなに離れてないけど文化とかが全然違うから不思議だなと思ったし、もっと他の国のことも知りたいと思いました。

ネパールについて全然知らなかったから、食べ物とか行事とか色々知れてうれしかった。みんな日本語がすごく上手で、自分ももっと英語が上手く話せるようになりたいと思った。

違う国でも、日本と似てること、違うことが沢山あって知ることができてとても楽しかった。特にやさしい日本語でも十分にコミュニケーションをとることが出来た。



ねらい

授業「Cross Cultural Understanding」の一環として、
多様な国の人と交流し、多文化理解を促進する。

実施日 2025(令和7)年9月2日(火)

実施方法 対面

対象 2学年 1クラス 20名

講師 アーツカレッジヨコハマに在学中の留学生 5名

- ① RAKIB MD(バングラデシュ)
- ② ALAMILLO QUENCY SHIRLETTE(フィリピン)
- ③ BAJRACHARYA KARNA DATTA(ネパール)
- ④ WIJAYAWARDENA KUSAL ISIWARA(スリランカ)
- ⑤ BASLOVIAK EVGENIIA(ロシア)

実施内容

- 留学生1人に対し、高校生3~4人でグループを作り、各グループに「福笑い」「あやとり」などの交流コンテンツとお菓子が用意された。
- 交流は英語で実施した。
- 交流は1ターン20分×2ターンで行い、生徒は2名の留学生と話す機会を持てた。
- 質問テーマは食事やアニメなどの文化、日本に来て感じた母国との違いなど。
ロシアの留学生からはボルシチやピロシキの紹介があった。
- 終始活発に交流が行われ、時間いっぱいまで会話が続くなど、
密度の高いコミュニケーションとなった。



参加した生徒の感想

日本と他国の違いや優しさをととても感じた。お菓子も、幼い頃にしか食べない方がいたり味の違いを感じてる方もいて驚いた。思っていたより日本を知っていて嬉しかった。

文法とかあまり気にせず雰囲気喋れる。それでかなり楽しめた。ネパールやスリランカの文化を生の声で聞けて差異を楽しめた。

初めて話す国の人もいて、その文化を聞くのが楽しかった。日本のゲームやお菓子も楽しみながら参加してくれて嬉しかった。

現地のことを聞いた。折り紙をやった事があったり、日本でさまざまなことを学んでいるとわかった。来た理由もさまざままで理解し合えた。

色々な国の人と話せて楽しかった。緊張してあまり話せなかったのもっと質問できるよう努力したいと思える良い機会だった。



ねらい

4月より学習している refugee (難民) について
理解を深める。

実施日 2025 (令和7) 年9月3日 (水)

実施方法 対面

対象 高校3年生 1クラス 34名

講師 漆原 比呂志 氏

(一般社団法人JLMM事務局長/NPO法人アルペなんみんセンター地域連携コーディネーター)

実施内容

- 事前学習が進んでいたため、難民の定義説明は簡潔にし、難民キャンプの実情や、日本に来た難民の方の話を中心に講演が進められた。
- 講師が難民キャンプを訪れた際、国軍による爆弾の音や偵察ドローンの音が聞こえていたことが語られ、現場の緊迫感が伝えられた。
- 状況がひどい時は毎日爆弾が落ちるため、人々が大きな木の下で身を寄せ合って夜を越すといった、避難生活の厳しさが説明された。
- 別れ際に難民の方々から「こんな大変なところに日本から来てくれてありがとうございます」と涙ながらに言われた経験から、「世間から置き去りにされている場所」の現実が語られた。
- 難民には「A: 祖国に戻る」「B: 受け入れ国の市民になる (難民認定)」「C: 第三国定住」の3択しかない、という問いが提示され、「自分が難民ならどれを選ぶか」を考える時間が取られた。
- 日本の難民受け入れ率は国際比較で低く、2024年で2.2%であることが紹介された。
- 難民受け入れ数は、その国の人権感覚を測るバロメーターである、という視点が示された。
- 申請しても当日泊まる場所がなく路上生活になるケースが多いこと、アルペなんみんセンターが住まいの提供も行っていることが紹介された。
- 多くが難民認定されず「仮放免」となり、移動制限 (都道府県を越えられない)、就労禁止、社会保障なしという厳しい条件があることが説明された。
- 介護資格を取得して就労が実現した方が「やっと人間になれました」と語った話から、働いて社会に参画する重要性が強調された。

参加した生徒の感想

高校生が難民キャンプに行くのは難しいので、生の話が聞けて、自分も困っている難民の方がいたらできる限り行動したいと思った。

ネットやニュースだけでは半信半疑もあったが、実体験から難民が直面する厳しさに気づいた。すぐ解決できなくても、同じ惑星に住む仲間として心に留める必要があると思った。

世界で80人に1人が、2秒毎に1人が移動を強いられていると知り衝撃だった。遠い出来事ではなく自分にも関係がある。国際社会が協力して支援の仕組みを強める必要があると感じた。

私が知らなかった難民の現状を知れた。直面する選択やキャンプの現状を踏まえ、高校生にできることを知り将来に活かしたい。





神奈川県立七里ヶ浜高等学校

グローバルな視野で活躍する人と出会う・進路を考えきっかけをつくる

ねらい

ワークショップ等を通じて韓国について学び、
理解を深める。

実施日 2025(令和7)年10月16日(木)

実施方法 対面

対象 高校3年 1クラス 20名

講師 崔 英善 氏(韓国語講師/日本外国人ネットワーク代表)

実施内容

- 前半は、事前に生徒から寄せられた質問への回答を軸に、韓国の基礎知識、高校生の生活、文化差、観光地や若者スポット、紙幣、知っておいた方がよい点などが丁寧に説明された。
- 制服は個性を大切にするため色がカラフルで襟も個性的であること、さらに「生活服」という動きやすい服もあることが紹介された。
- 給食は毎日日本より量が多い傾向があり、受験後にダイエットする文化があることが紹介された。
- 「生きづらい」とされる背景として、息抜きのための記念日イベントが多いこと(「恋愛の記念日」、4月の「モテない人の日」など)が共有された。
- ソウル観光・カンナムのステータス、整形への社会的態度(寛容だが隠したがる人もいる)など、都市文化にも触れた。
- 冬の寒さと床暖房、マンションの多さなど住環境の特徴が説明された。
- 軍隊(徴兵)について、免除のケースや、女子の志願入隊の動き等も言及された。
- 食文化は「コク」を大切にし混ぜる文化、副食のおかわり自由などが紹介された。
- 「文化は地理によって生まれる」「寒いから料理が熱い」など、背景を理屈で捉える姿勢が強調された。
- 日本は協調性、韓国は個性という価値の置き方の違いが、「何を美しいと思うか」の差として語られた。
- 相手国理解がTV中心になりがちな点、TV局の情報が必ずしも客観的でない点(自身の経験も踏まえた注意喚起)があった。
- 地球儀の中心が国によって違う例から、「真実は国の都合で語られることがある」ことが示された。
- 「グローバルに生きるには人間関係づくりが大切」「1ヶ月でもいいから海外で暮らしてほしい」など、具体的な行動を促すメッセージで締めくくられた。

参加した生徒の感想

韓国だけでなく日本との比較で説明して下さったのが腑に落ちました。鵜呑みにできないことは理屈を調べるとい考え方が新鮮で、進路にも活かせそうです。背景を学ぶ大切さを知れました。ありがとうございました。

将来いろんな国に行って多角的な視点を持つのが夢なので、とてもためになりました。

文化が生まれる仕組みを深く知れて面白かったし、もっと学びたいと思いました。

日常の些細な違いを深く考えたことがなかったが、話を聞いていろいろな視点で考える面白さを知った。





横浜創英高等学校

貧困、平和、人権問題など、地球規模の課題を考える

ねらい

「英語探究」の授業で途上国の課題解決を扱っている。
グローバル化が進む中、貧困・紛争・人権問題など
国際社会全体に関わる課題に生徒が触れる機会とする。

実施日 2025(令和7)年10月17日(金)

実施方法 対面

対象 高校2年生 2クラス×2時間分 合計160名程度

講師 エソダ バスネット 氏(翻訳・通訳者、国際理解講師)

実施内容

- 講師の生い立ちとして、女性として育つ中で幼少期から家事(手洗い洗濯、掃除等)を担い、宿題の時間もなく育った経験が語られた。ホームステイに来た日本の学生が驚いたことで、日本では男女平等に教育を受けられることを知り、留学を志した。
- 留学中、字が読めず「油」と「みりん」を間違え火事になりそうになった体験から、日本語を頑張ろうと決意した話が共有された。
- 学校の卒業率が低いこと、政治が教育環境を左右すること、教員不足など教育課題も示された。
- 教育の大切さが理解されないことや、カースト制・男女差などが就学に影響する点が語られた。
- 期末試験に合格しないと進級できないこと、高校卒業試験が就職・進学につながるものが紹介された。
- 格差(貧困、ジェンダー、インフラ、教育)の具体例として、車(バン)で高級校に通う子と、5時間かけて通学する子の対比が示された。
- ネパールの強みとして、多文化共存、英語を使える点等が語られた。
- ボランティア「たまごプロジェクト」(ゆで卵の提供、寄付でトイレ建設、SNSでの情報公開等)が紹介された。
- ネパール人側も日本の災害時に炊き出し等で支援していることが共有された。

参加した生徒の感想

ネパールは大変そうと思ったけど、いい所も沢山あって多民族・多文化国家や祝日が多い所が良かったと思います。たまごプロジェクトで卵を送ったりトイレを建設したりしていて素晴らしいと思いました。日本語も上手で驚きました。私も将来少しでも役に立てるよう寄付などしたいです。

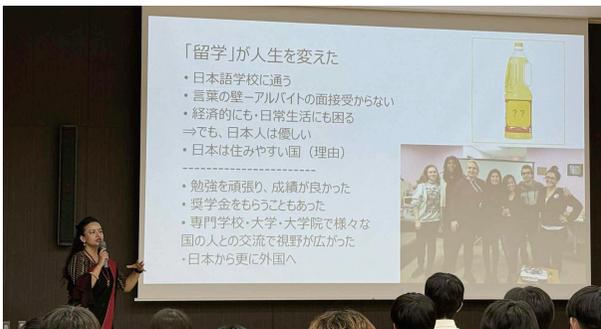
言葉の壁や経済的困難の話を知り、他国民が日本に来て住みやすい環境を作るべきだと考えました。ネパールの格差や出稼ぎの深刻さも知り、当事者意識を持ってました。寄付以外にも支援できることがあると思いました。

雰囲気が明るく楽しく感じられた。実体験をもとに話していて、ネパールの現状をよりリアルに知ることができた。

話が上手く聴き入った。国の状況も知れていい講話だった。支援は大変だと思うが頑張してほしい。

興味深かった。明るく話していてこちらも楽しかった。

エピソードや日本との違いがわかった。参加型で面白かった。





神奈川県立伊志田高等学校

多文化社会を生きる

ねらい

異文化理解に関心を寄せる機会とするとともに、国際的視野を持つことでグローバルパーソンになるための生徒自身の意識改革につなげる。

実施日 2025(令和7)年10月24日(金)

実施方法 対面(伊勢原市民文化会館)

対象 高校生全学年 22クラス 851人

講師 武内 剛 氏(株式会社ぶらっくかんぱにー 代表取締役)

実施内容

- 登壇直後に英語で会場を盛り上げたうえで「やっぱり日本語でお願いします」の一言で笑いをとり、掴みの強い導入となった。
- 自身がカメルーンと日本のミックスであることを紹介し、世界地図で「カメルーンはどこか?」というクイズから講演が始まった。
- 見た目を理由に言われ続けた経験から、明るい性格でありながらネガティブに引っ張られ、過ちに至った時期があったことも率直に語られた。
- ニューヨークでの生活を通じてアイデンティティを見つめ直し、悩みが小さく感じたこと、その後7年住み自由を謳歌したことが語られた。
- 帰国後お笑い芸人となり、2020年に父親に会いに行く旅を開始。映画「パドレ・プロジェクト/父の影を追って」の紹介があった。
- 父の手掛かりが乏しい中、バーでの聞き込みから父のメールアドレス入手、メール送信、返信、再会へと至る過程が語られ、再会シーン映像では涙する生徒も多かった。
- 父とのやり取りが1年続き、映画を観てもらえたこと、父が危篤となり病室で最後の面会をしたことなど、家族の重みを実感するエピソードが共有された。
- 後半は「あなたも今日から地球人!多文化クイズ」で雰囲気を変え、クラス対抗で世界の多様さを体感する構成となった。

参加した生徒の感想

父親を探すため国境を越えて最後まで諦めず交流し続ける姿から、言語が違ってても諦めなければ伝わることがあると学びました。現地の人へのあたたかさも素敵だと思いました。

人の気持ちや過去は、わかろうとしても完全にはわからないことがあると知りました。だからこそ触れてほしいなような話題に配慮するなど心がけたいです。

国や人種が違ってても家族は家族だと感じました。言語の壁があっても強い意志で伝わることを知り、多くの発見がありました。

自分は差別とっていなくても相手は差別に感じる「無意識の差別」があると気づきました。外国人やハーフの人を対等に見ることが大切だと思いました。

海外にも視野を広げて挑戦したいと思いました。





横浜清風高等学校

多文化社会を生きる

ねらい

グローバルな視点で多文化共生を意識し、
海外へ行くことを具体的にイメージするきっかけとする。

実施日 2025(令和7)年11月1日(土)

実施方法 対面

対象 1クラス 16名

講師 矢野 デイビット 氏(ミュージシャン、一般社団法人Enije代表、明星大学客員講師)

実施内容

- 家族構成として、3兄弟の上に父親の違う姉(両親ともガーナ人)がいることが共有された。
- 父は建築家で、ガーナに野口英世記念館を建設する関係で滞在していたことが語られた。
- 当時の首都アクラの暮らしは、今の日本の田舎よりも田舎で、「場所の違い」というより「時代が違う」と表現できるほどだったという話があった。
- 日本に来て、学校は社会と家庭をつなぐ場所であり、家族が日本文化を理解するまでに長い時間が必要だったと振り返った。
- 型にはまる必要はないこと、心とマインドは嫌な経験ではなく良い経験で満たす方がよいことが伝えられた。
- 「どんな大人になりたい?」「権力や力って何?」という問いを通して、自分自身の価値観を言語化する機会となった。
- 英語が流暢であることよりも、人間としてどうあるべきかが大事、という軸が示された。
- ガーナの学校が賞を取った理由として、優秀さだけではなく、ニーズを理解し満たし、楽しく面白くしたことが大きいという話があった。
- 多文化共生は分断を超えるために「対話」が鍵であり、対話を通じてバランスを取っていくというメッセージが強調された。
- 代表生徒の挨拶では、すれ違いをチャンスに変えたい、偏見に向き合い未来に活かしたい等の言葉が述べられた。

参加した生徒の感想

体験談が心に響き、人間関係や進路が以前より明確になりました。噂や決めつけをなくし、対話で考えを変えていけばよいと学びました。挑戦してみようと思いました。

自分もナイジェリアと日本のハーフで違いを気にしていたが、過去を照らし合わせると悩みがちっぽけに感じ、人生を考える良い機会になりました。

見たものが全てと思いがちだが、経験した本人が感じたことが大切だと思いました。異国の子どもたちが日本の災害に涙する姿を見て、自分にも貢献できることがあると感じました。価値観を人生に活かしたいです。





ねらい

異国・地域の文化を直接体験し、
多文化共生への理解を深める。
対面での実践的な表現力とコミュニケーション能力を養う。

実施日 2025(令和7)年11月12日(水)

実施方法 対面

対象 2学年 59名

講師 YMCA健康福祉専門学校に在学中の留学生 31名

- ① ベトナム 14名
- ② ミャンマー 10名
- ③ ウズベキスタン 1名
- ④ フィリピン 2名
- ⑤ インドネシア 1名
- ⑥ ネパール 1名
- ⑦ バングラデシュ 1名
- ⑧ 中国 1名他

実施内容

- 1コマ目は生徒の司会で交流会が開始され、事前に分けたグループごとに留学生との交流を行った。
- 自己紹介の後、生徒が準備したコンテンツ(折り紙、書道、祭り文化紹介など)を通して交流した。
内容は多岐にわたり、相互に紹介し合う構成となった。
- その後、留学生が準備したプレゼンテーションを全体に向けて発表。フィリピンの留学生は英語で発表した。時間の都合で1コマ目は5グループ中3グループのみが発表した。
- 2コマ目は残り2グループの全体発表から開始し、その後再びグループ交流を行った。
- 各コマの最後に集合写真を撮影し、達成感と一体感のある締めくくりとなった。

参加した生徒の感想

知らなかったことや文化を深く知ることができ、とても勉強になりました。面白いと思うところも多く、この機会があって嬉しかったです。本当にありがとうございました！

最初は不安だったけど、実際は思っていた以上に楽しかった。衣装の紹介や実際に服を着て来てくれたりして、外国のことを学ぶ興味が湧いて楽しかった。

留学生のスライド発表が見て楽しく、日本以外の国を知れて良かったです。交流時間が短く話す時間が限られ残念でしたが、貴重な経験でした。ありがとうございました。

交流した方々の国を深く知れ、日本の文化を紹介して話せたことも良い経験になりました。



ねらい

国際英語クラスの生徒が、
海外に興味を持つ／海外へ行くきっかけづくりとし、
海外で求められるものについて考える機会とする。

実施日 2025(令和7)年11月27日(木)

実施方法 対面

対象 1～3学年 3クラス 81名

講師 星野 ルネ 氏(漫画家、タレント、放送作家等)

実施内容

- 自己紹介:NHK、国連、JICAとの協働実績等を紹介。
- カメルーン紹介:国名、国旗、「アフリカの縮図」と呼ばれる点、縦に長い国土ゆえ気候・文化・言語が多様で、フランス語と英語が公用語であることなどが説明された。
- 都市部と村の差は、日本の都市と村の差というより「時代が違う」と表現できるほどである、という具体的なイメージが示された。
- 同じ時間を共有することで、“未知の外国人”が“既知の友人”になり得る、という関係性の変化が語られた。
- 人は偏見や思い込みを持ちやすいこと、生まれや環境など努力では変えられない要素が結果に影響することが言語化された。
- 国の違いだけでなく、気質の違い／類似性で理解が促進されたり困難になったりする、という多面的な理解が示された。
- 「どの国の人か」ではなく「その人がどういう人か」で向き合いたい、という締めメッセージ。
- 身体的特徴ではなく、髪型や服装など自己表現を褒めることの大切さが述べられた。

参加した生徒の感想

黒人だから、日本人じゃないから、言語が違うから等で避けるのではなく、多文化として受け止めることが大事だと改めて分かりました。国によってルールやマナーが違うことも含め、多文化社会として受け止めたたいです。ありがとうございました。

偏見は気づかないところまで固定概念に浸透していると感じ、危機感を持ちました。文化を自分の目と足で学ぶのが目標なので、英語だけでなく国民性や習慣も学びたい。

文化が違って生活も全く違うと思っていたが、それは偏見で、意外とどの国も同じということに驚きました。決めつけず、なぜそうするのか理解したいです。

両親が日本人じゃないので家庭と学校で文化差を感じることもあり共感できました。漫画で影響を与えていることも知り、実体験を大切にしたいです。



ねらい

留学生との文化交流を通じ、
相互理解とコミュニケーションの経験を得る。

実施日 2025(令和7)年12月12日(金)

実施方法 対面

対象 高校1年～3年 希望者のみ 約19名程度

講師 横浜デザイン学院に在学中の留学生 5名

- ① LE HOAI TRANG(ベトナム)
- ② HLYAM NINE(ミャンマー)
- ③ ISH MAM(バングラデシュ)
- ④ WANG XIAO(中国)
- ⑤ NGUYEN THI THUY LINH(ベトナム)

実施内容

- 生徒は4グループに分かれ、自己紹介の後、DOBBLE(カードゲーム)を用いて交流した。
- 先生方が準備したお菓子、留学生が持参したお菓子を食べながら、リラックスした雰囲気では話が進んだ。
- 各グループでは、留学生が「お題の絵」を描き、高校生が当てるゲームを行い、言語以外の表現も活用したコミュニケーションが生まれた。
- 終了時には別の生徒が代表でお礼の挨拶を行い、留学生代表からも生徒に向けたお礼が述べられた。
- 交流後に集合写真を撮影し、活動を振り返る区切りとなった。



参加した生徒の感想

完璧にコミュニケーションを取るのには難しいけど、ゆっくり話すと伝わりやすくなると分かった。ノリがよくて面白かったです。

いろいろな国の人と話せて、いろいろな国の人がいると分かり、もっとたくさんの人と話してみたいと思いました。

どの留学生の方も優しく、英語が分からないときも優しく教えてくれました。不安だったけど、ゲームを通して仲良くなれて思い出に残る1日でした。

言語が通じにくいところがあっても、伝えようと思えば伝わることもあると感じました。しっかりコミュニケーションが取れて良かったです。



ねらい

貧困・平和・人権問題を
地球規模で課題として考え、
「私たちに出来ることは何か」を探究する。

実施日 2025(令和7)年12月22日(月)

実施方法 対面

対象 1学年7名、保護者1名、卒業生1名

講師 辰野 まどか 氏

(一般社団法人グローバル教育推進プロジェクト(GiFT)ファウンダー・代表理事)

実施内容

- テーマ「貧困・平和・人権問題を地球規模で課題を考える～私たちに出来ることは何か～」のもと、冒頭に自己紹介と書籍紹介が行われた。
- 続いて、講師が参加者の輪に入り、チェックインの時間を設定。自己紹介、今感じていること、参加理由(関心テーマ・気になっていること)について、財団担当者も含め全員が発言した。
- 一般社団法人GiFTの活動紹介があり、海外経験をすることの提案もなされた。
- 地球規模で課題を捉える必要性や、チャレンジすることの重要性が、講師自身の経験に基づいて説明された。
- 最後にチェックアウトの時間を取り、「今感じていること」「これから踏み出したい一歩」について、講師・参加者・財団担当者を含めそれぞれが言葉にして締めくくった。



参加した生徒の感想

先生の幼い頃からスイスの会議に行った事や、世界の衣食住の違いを船の中で共有し合う事が凄く驚いた。今の若いうちに、グローバルシチズンの事を学べて良かったと思った。

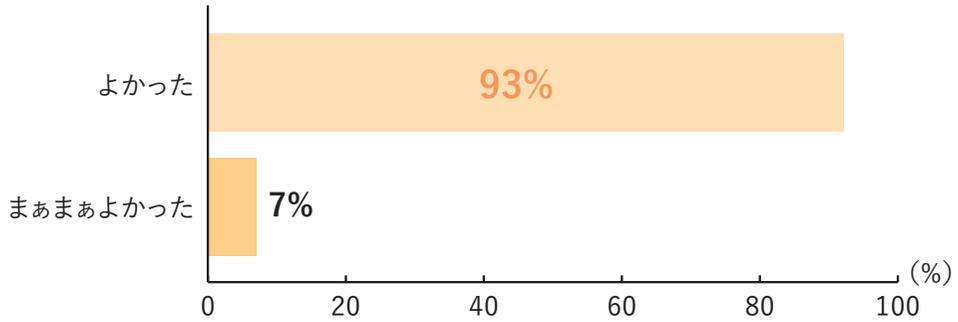
SDGsとよく聞くものの知識は漠然としていました。ニュースでは事件事故や戦争は報道されるけれど、このような活動は特集されないと分からず、進んで知ろうとしていなかったのが、今回とてもよい機会を貰えました。相手の意見や人柄を尊重して、理解する努力が大事と改めて思いました。

世界には私が知らないことが多いので、まずは知っていくのが大切だなと思いました。

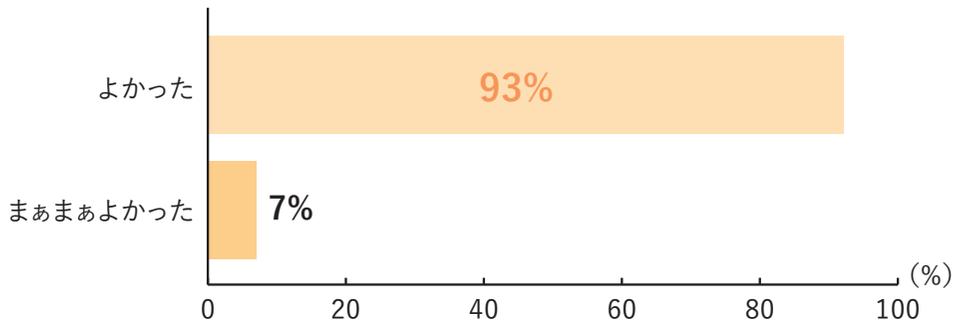


先生方の
アンケート
結果

事業全体



講演／ワークショップ



本事業申込の理由

- 校外のリソースを活用してより充実した内容としたかった 14
- 外部から講師を呼びたかったが予算がなかった 4
- 国際教育をテーマとした講演／ワークショップを実施
したかったが、内容・講師についての情報がなかった 7

(複数回答可)

先生方の 感想 (一部)

申込からお打合せ、当日の講演まで丁寧に連携させていただきスムーズに進めることができました。当初、「異文化共存」を軸に講演をお願いするつもりでいました。しかし、講師の方との打ち合わせの中で、岐路に立つ高3生に沿った内容も盛り込もうとのご提案があり、結果的に生徒たちもこれからの糧となる言葉をいくつも心に刻めた様子でした。生徒自身もデイビットさんの紡ぐ言葉に勇気ももらえたと思います。

幼少期の苦悩の経験を現在、ご自身の付加価値として活躍されている様子に非常に感銘を受けました。生徒たちにとっても将来の幅を広げる貴重な時間になったかと思います。

今年も様々な国の留学生に来てもらうことで、多くの国の文化に興味を持ったり、英語を使うモチベーションが上がったりしました。また来年もお願いしたいです。ありがとうございました。

昨今の最新情報をわかりやすくお話しいただき、生徒たちにもたいへん好評でした。とても有意義な時間になったと思います。来年度もまた、よろしく願いいたします。

用意していただいたPPTがとてもクオリティが高く、ネパールについてそれぞれの分野から説明をしてくださっていながらも、共通する「ネパール語をおぼえよう!」というコーナーがあり、とても有意義な時間でした。小規模だからこそ、1人1人が質問をしたりできたのはとてもよかったです。

チェ先生のお話がとても面白く、生徒にとって有意義な時間でした。韓国の高校生や観光地、先生のご経験のみならず、文化とは何かやグローバル人材についても言及いただき、深い学びができたと思います。計画、運営にご尽力いただきありがとうございます。大変感謝しております。

難民について学生たちにお話いただくのは今回で3回目です。毎回、学生たちにとって大変興味深く、有意義なお話を伺うことができました。心より感謝申し上げます。

40人の生徒にご講義とペアワーク等を実施していただき、大変ありがとうございます。当校では、国際教育、異文化理解を推進しておりますので、次年度以降も是非様々な面でお願したいと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。

本日はどうもありがとうございました。生徒に問いかけながら、また星野さんの漫画を見せていただきながら、多文化社会で生きるといってお話をしていただけるのは、大変分かりやすくどの生徒たちにも印象に残るお話になったと感じております。

これまでの 実施校 一覧

(派遣授業を実施している2009年度から2025年度までの実績)

県立高校

愛川高校	久里浜高校	橋本高校
麻生高校	港北高校	氷取沢高校
麻生総合高校	栄高校	ひばりが丘高校
厚木王子高校	相模向陽館	平塚江南高校
厚木高校	相模原青陵高校	平塚商業高校
綾瀬西高校	座間総合高校	平塚中等教育学校
有馬高校	七里ガ浜高校	藤沢総合高校
伊志田高校	新栄高校	保土ヶ谷高校
磯子高校	松陽高校	三浦臨海高校
岩戸高校	城郷高校	向の岡工業高校
海老名高校	住吉高校	元石川高校
大楠高校	逗葉高校	弥栄高校
小田原高校	西湘高校	大和東高校
追浜高校	瀬谷西高校	百合丘高校
神奈川総合高校	相武台高校	横須賀大津高校
神奈川総合産業高校	大師高校	横須賀高校
金井高校	多摩高校	横須賀南高校
金沢総合高校	茅ヶ崎高校	横須賀明光高校
鎌倉高校	茅ヶ崎西浜高校	横浜旭陵高校
上鶴間高校	津久井高校	横浜国際高校
川崎高校	鶴見総合高校	横浜翠嵐高校
川崎北高校	鶴嶺高校	横浜清陵総合高校
川崎工科高校	永谷高校	横浜立野高校
川和高校	新羽高校	横浜平沼高校
希望ヶ丘高校	白山高校	横浜緑ヶ丘高校
霧が丘高校	柏陽高校	(全日制、定時制校を含む)

横浜市立

桜丘高校	みなと総合高校	横浜総合高校
東高校	南高校	横浜商業高校

川崎市立

高津高校
橘高校

横須賀市立

横須賀総合高校

私立高校

アレセア湘南高校	逗子開成高校	横浜清風高校
英理女子学院高校	自修館中等教育学校	横浜創英館高校
神奈川学園高校	クラーク記念国際高校（横浜）	横浜創学館高校
関東学院六浦中学校高等学校	橘学苑高校	横浜隼人高校
慶應義塾高校	森村学園高校	横浜富士見丘学園高校
向上高等学校	横浜国際女学院翠陵高校	横浜雙葉高校
相模女子大学高等部	横浜女学院高校	横須賀学院高校
シュタイナー学園	横浜翠陵高校	

高校以外では神奈川県高等学校国際教育研究協議会主催のセミナー、教員研修などにも派遣した実績があります。

これまでの講師・ゲストの方々の繋がりのある国・地域一覧

アメリカ	コスタリカ	ネパール
イギリス	コロンビア	ノルウェー
イスラエル	コンゴ民主共和国	バングラデシュ
イタリア	シリア	フィリピン
イラン	シンガポール	フィンランド
インドネシア	スイス	ブラジル
ウクライナ	スウェーデン	フランス
ウズベキスタン	スーダン	ブルガリア
エジプト	スペイン	ベトナム
オーストラリア	スリランカ	ペルー
オランダ	セネガル	ポルトガル
ガーナ	タイ	香港
カザフスタン	台湾	マレーシア
カタール	中国	ミャンマー
カナダ	デンマーク	メキシコ
カメルーン	ドイツ	モンゴル
韓国	トルコ	ルワンダ
カンボジア	トルクメニスタン	ロシア

その他、韓国・朝鮮などに繋がりのある方、無国籍の方などもゲストとして高校生にお話ししていただきました。

講師紹介

1



やの 矢野 デイビッド

ミュージシャン、一般社団法人
Enije代表、明星大学客員講師

ガーナ出身。日本人の父とガーナ人の母との間に生まれ、ガーナで起きた暴動事件の影響により6歳から日本に移住。主な講演テーマは、アイデンティティ、マイノリティ、人種差別、国際交流、異文化共生など。

2



エンダ バスネット

翻訳・通訳者、国際理解講師

ネパール出身。留学生として2005年来日。横浜国立大学・大学院で国際協力分野の博士課程単位を取得し、その後、国際理解、ジェンダー、キャリア教育や多文化共生などをテーマに高校や大学などにおいて日本語や英語で講演を多数行っている。

3



きん そんどん 金 成東

ワンダーファイ株式会社 事業開発ディレクター
神奈川県生まれ。神奈川県立中高級学校、横浜国立大学工学部卒。大手総合商社に7年間在籍し、インフラ建設案件に関わり約20ヶ国を訪れる。その後、「違うことが面白い」と思える教育を実践すべく、教育スタートアップにてアプリ開発に関わる。

4



はやし 林 リダ

元川崎市立高校の理科教員／日本で育つ
ムスリムの子どものための支援活動に従事

パキスタン人の父、台湾人の母を持つ日本生まれ日本育ちのムスリマ(イスラム教徒の女性)。大学では物理学を専攻。大学卒業後、川崎市の理科教員になり、現在は横浜 Masjid を中心に日本で育つムスリムの子どもたちのための支援活動を行っている。

5



さ さ き せいしょう 佐々木 聖照

The Lit Zone Beside(リットゾーン)
共同代表、自治体職員

中国瀋陽市出身。中学校卒業後に来日。フリースクールに一年間通ったのち、高校、大学へと進学した。横浜市の公務員として勤務する傍ら、外国につながる子どもたちの進路や学習支援を行う「多文化ユースプロジェクト」のメンバーとして活躍中。

6



ビオリーナ ニコロバ

マーケティングプランナー、
異文化理解講師

ヨーロッパ数か国に住んだ経験があり7か国語を操る。15歳で来日、高校と大学を卒業。日本の大手メーカーで8年間マーケティングに従事し、2019年に独立。現在は全国の地場産業マーケティングプランナーとして活躍中。

7



うるしはら ひろし 漆原 比呂志

一般社団法人JLMM 事務局長／NPO法人アルベなんみんセンター 地域連携コーディネーター
神奈川県生まれ。国際協力NGOのJLMMからカンボジアとベトナムに6年間派遣され、現在は事務局長として日本からの支援を行う。2011年から10年間、カトリック東京ボランティアセンターにて東日本大震災の被災者支援にも関わっており、現在に至る。

8



オクサーナ・ピスクノワ

語学講師／ウクライナ避難民支援者

ウクライナ・ドネツク州生まれ。1996年来日。2014年のロシアによるクリミア・ドンバス侵攻後、ウクライナ文化を伝えるためイベントや講演会を実施。2022年のロシアによるウクライナ侵攻後は、ウクライナ支援に尽力し、現在は横浜市で避難民サポートを行っている。

財団で講師をお願いした方々等の
インタビュー動画を下のQRコードで読み取り、
ご視聴いただけます。

**講師の派遣にあたっては、
左の方々に限定せず、
プログラムの希望を踏まえて候補を探します。**

HPは「神奈川 高校派遣事業」で
検索してください。



高校生世代向けセミナーも開催しています！
違う学校の生徒たちといっしょに学び、
ディスカッションをしながら
「世界の入り口」に立ちましょう！

高校生などを対象とした
セミナー情報については、
こちらのインスタをフォロー！



お問い合わせ・お申し込み

公益財団法人かながわ国際交流財団 高校派遣担当

住所:〒221-0835 神奈川県横浜市神奈川区鶴屋町2-24-2 かながわ県民センター13階 多言語支援センターかながわ内
電話:045-620-5045 E-mail:haken-2026@kifjp.org WEB:www.kifjp.org/student/highschool

